

〈書き直し〉を通じた異文化コミュニケーションの方法

林 圭 介 法政大学中学・高等学校

なぜ〈書き直し〉というテーマで国語教育の方法を作ろうと試みるのか？それは〈書き直し〉が権威あるオリジナルという見方に捻りを加える方法だからである。しかし、捻りを生み出すためには、オリジナルの表現や意味、それが書かれた時代や場所のコンテキストを含めて考察する必要がある。〈書き直し〉は書くことだけでなく、読むことときわめて密接に結びついた双方向のアプローチだからである。

その意味で、教室で〈書き直し〉を試みることは、学習者にそれぞれの解釈がオリジナルに対してどのような批評的な意味を担うのかを自覚するきっかけを与える。オリジナルと異なる表現を作り出すことによって、〈書き直し〉でいかに意味を生み出すことができるかに着目させるからだ。〈書き直し〉とは、学習者の表現が他者によって書かれたオリジナルにどのような意味を持つかを学ぶこと、すなわち、言語の社会的な広がりや身に付ける体験なのである。本稿では勤務校の高校2・3年生を対象に行う「言語表現法ゼミ」での三つの教育実践から、国語教育における〈書き直し〉の可能性を論じたい。

1 小説家による〈書き直し〉

まず一学期に行ったのが小説家による〈書き直し〉である。扱ったのは、村上春樹『街と、その不確かな壁』(以下、『街』)だ。それは、この小説が後に『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(以下、『世界』)へ書き直されているからである。実は、『街』は春樹自身が「志ある失敗作」と述べ(村上1990)、これまでどの作品集にも収録されてこなかった。そのため、書き直された後の『世界』が春樹の意図の〈成功〉を、書き直される前の『街』が春樹の意図の〈失敗〉を意味するものと位置づけられて

きた。本節では、春樹の〈書き直し〉に着目し、このような〈成功〉と〈失敗〉という見方とは異なる、二つの小説に共通する構造について考察したい。

『街』のあらすじを確認することからはじめよう。『街』は、30を前にした若者でなくなりつつある「僕」が、10年前に死んだ「君の影」を思い出し、「本当の君」が住むという壁に囲まれた街に向かうところから始まる。街では時が失われ、人々の心と体から影が切り離されている。そのために図書館で働く「君」は「僕」を知らないが、「僕」は出会った頃の姿を「君」に重ね、二人は次第に親密になっていく。

しかし、図書館で古い夢を読む仕事に就く「僕」は、その夢が見せる幻から街が「僕」のための場所でないことを知る。そこは何もかもが望み通りになる点で、何もかもが失われた世界だったのだ。「僕」は「影」と共に街を脱出し、望み通りにはならない「全ては消える」現実生きることを選ぶ。

一方、『世界』のあらすじは、もう少し複雑だ。それは、『街』の舞台であった「世界の終り」に、「ハードボイルド・ワンダーランド」という別の世界が加えられているからである。この「ハードボイルド」の世界で「私」は太った女の子に導かれ、祖父の博士が作ったシステムの中で永遠に生きていかなくてはならなくなる。そのシステムが「世界の終り」だった。もう一つの世界である「世界の終り」の「僕」は、「影」と共にいったんは元の世界に戻ろうと考えるが、街が自分の作った世界であることを知り、「影」と別れて街に残ると決意するのだ。

このようにあらすじをまとめることで見えてくるのは、主人公が現実から虚構の世界を選ぶようになる変化である。先行研究でも、この主人公の選択の変化に春樹が小説を書き直した理由(山根

2007)や春樹の小説世界の深まりが読まれてきた(大澤 2010)。それは内省的な自己の発見と意味づけられてきた(加藤 2015)。

しかし、春樹は一貫して他者への関わりを追求してきたふしがある。それは、二つの小説にはいずれも他者が知っていることを主人公が知るという構造が組み込まれているからだ。学習者が指摘したのは、『街』や『世界』に描かれた世界を作ったのはいったい誰なのかという疑問だった。

『街』でどのように世界が語られているかを確認しよう。『街』では、「君」がすでに知っていたことを「僕」が知っていくプロセスが語られている。

あなたが今抱えているのはただの私の影。
あなたが今感じているのはあなた自身の温もり。
なぜあなたにはそれがわからないの? (村上 1980。傍線引用者、以下同様。)

冒頭部分で「君」が、「僕」がわかっていないことを責める場面である。この無知ゆえに、「僕」は街に戻ると決意する。反対に「僕」が街を出ると決意するのは、「君」がすでに知っていたことを知ったときである。僕が知ったのは街が死の世界であり、その街を作ったのが死んだ「君」自身だったことだ。このように、『街』には「君」がすでに知っていたことを後で「僕」が知るという構造がそれとなく仕掛けられているのである。

逆に、『世界』では二人の主人公がいずれも相手がすでに知っていたことを知るという構造が明らかにみだされている。たとえば、「ハードボイルド」では「ええ、知っていたわ」と少し迷ってから彼女は告白する。「私」が知るのは、博士と娘の二人が共に「私」の知らない世界をすでに知っていたことである。この他者の知に「私」は衝撃を受ける。

しかし、この衝撃ゆえに「私」は自身の消滅を受け入れることができるようになるのだ。結末部分で娘が「私」に語る「あなたがもし永久に失われてしまったとしても私は死ぬまでずっとあなたのことを覚えている」という言葉は、自分を知っている他者がいると知ること、すなわち、他者の知を知ることによって自分がこの世界から決して失われないことを「私」に教えるのである。

「世界の終り」でも同記事態を「影」が結末で告げる。「そんなことは前から知っていたんだ。この街を作ったのは君自身だよ」と。この他者の知を知ることによって「僕」は「君のことは忘れないよ」と告げることができるのだ。たとえば、同じ結末の「自分の勝手に作りだした人々や世界を後に放りだして行ってしまうわけにはいかないんだ」という言葉には、他者の知を知った「僕の責任」が語られていると言えよう。それは「僕」の知が他者を消滅させないということである。『街』から『世界』への〈書き直し〉から浮かび上るのは、自己の選択に他者の知が関わっていることだ。他者の知をいかに引き受けることができるのか。この他者の知をめぐるドラマこそ、春樹が〈書き直し〉で読者に問うたことである。

2 翻訳者による〈書き直し〉

次に二学期に行ったのが絵本翻訳である。扱ったのは、神戸女学院大学が行う絵本翻訳コンクールの課題作品 *The Quiet Place* である。授業では、横浜商科大学で英語教育に携わる吉田孝子氏を招き、研究協力者で英語科の松村香奈氏が受け持つ「English Language Literacy」の37名の生徒と学内で翻訳コンテストに取り組んだ。本節では、絵本に織り込まれた社会背景に目を向けるようになった学習者の変化を追いたい。

絵本は、メキシコからアメリカに移住する少女が、故郷のメキシコにいる叔母に書いた12通の手紙からなる物語である。手紙に含まれるスペイン語や少女が慣れない英語を身につけていく過程をどう訳すかが工夫の凝らしどころだった。

たとえば、最初の手紙と学習者の翻訳である。

「ムーチャス・グラシアス、アリガト。」っていったの。いえに かえって、チャボお兄ちゃんに「アンティドート」の意味を きいてみた。もちろん、お兄ちゃんは 知ってたわ。それはね、クスリのことだよって。[I said, “Muchas gracias, thank you.” Then I asked Chavo about “antidote.” He knew, of course. It means a cure. (Stewart 2012)]

学習者が翻訳で工夫したのはルビである。スペ

イン語はわかるが、英語の単語がわからなかった少女の姿を絵本を読む読者に伝えるために、カタカナとルビを駆使したのだ。英語が「外国語」である点で、絵本の主人公と翻訳する自分は同じだと指摘したのは、この教室の翻訳者だった。

また、翻訳で難しいのは易しい単語でもある。

So many new things are in my life, not just new words but new people and new places.

I loved how safe I felt in that box! (Ibid.)

たとえば、“new”には「新しい」だけでなく、「よく知らない」「不案内の」というもう一つの意味がある。少女が感じた“new”には英語が「外国語」であるだけでなく、その言葉が使われる場所や使う人々に対する不安が込められている。言葉は単にモノとしてあるわけではない。言葉が使われる場所や言葉を使う人々の習わし、すなわち、文化が織り込まれているのだ。その意味で、少女が誕生会でもらう大きな箱は、見知らぬ文化から自分を守ってくれる壁の役割を果たしている。箱の中にいることで少女が安心を感じたのは、箱が異なる文化から自分を切り離してくれるものだったからである。

では、この箱とは何か？ 教室の翻訳者が発見したのは、箱自体の意味である。

Mother has started cooking for birthday parties, just like she did in Mexico. ... The mother of the birthday girl came into the kitchen and offered me a party favor. I asked for the biggest birthday box instead. (Ibid.)

傍線部を「メキシコのうちに やってみたいに」と訳すことで気づいたのは、少女の家庭がメキシコからアメリカになぜ移住してきたのかという点だった。それは彼女の一家がアメリカに出稼ぎにきたメキシコ移民だったからである。

かつてアメリカとメキシコの間には、「ブラセーロ計画」という外交政策が結ばれていた。これは、1942年に大量の兵役動員によってアメリカの産業が弱体化するのを防ぐため、メキシコからの出稼ぎ移民を受け入れることとした政策である(越川2007)。1964年に廃止されて以降、アメリカに受け入れられたメキシコ移民は「違法移民扱い」され、

国外に追放されることになってしまう。

また、手紙の冒頭の「1957年」に着目すれば、メキシコ移民と共に黒人を中心とした有色人種への差別をめぐる問題が頻発していた1950年代のアメリカの状況が浮かび上がってくる。結末で少女は自分の誕生会を皆に祝福されることで、これまで大切にしてきた大小さまざまな箱を必要としなくなる。それはこの絵本がさまざまな「色」の人種が交わっていく未来の世界の姿をこそ描こうとしているからではないか。メキシコ移民の少女の物語から教室の翻訳者が着目していったのは、言葉と人と国をまたいで生きた人々の歴史だった。

3 学習者による〈書き直し〉

最後は三学期に行う学習者による小説の〈書き直し〉である。これは「昔話や童話、民話、あるいは、作者の死後50年を経過した小説」を現代の小説として書き直す「Re-story」の試みをアレンジしたものである(「BOOK SHORTS」2015)。授業は、カナダのヒューロン大学で日本語教育に携わる研究協力者の白川理恵氏と共に、カナダで日本語を学ぶ大学生および日本で国語を学ぶ高校生が書いた「Re-story」について双方の意見を交換し、小説を投稿するという手順で進めている。本節では、「Re-story」の投稿までに日本の高校生が再考した「日本」や「日本人」のイメージの変化を辿り、「日本語」で文章を表現する意味を考えたい。

まずカナダの日本語教科書に収められた「越境文学」の読解から始めた(鎌田他2012)。最初の「日本語」の知識に関する設問では、たとえば、カタカナがどこの国の言葉かという「外来語」の設問に完答した高校生は一人もいなかった。一方、「話し手の関係を推測」したり「メール文の違い」を考えたりする設問では、ある言葉遣いで話し手がどんな人物であるかを容易に推測できた。たとえば、「これ、ちょーやばくねえ?」「マジ、やばいっすね」は先輩後輩の関係にある若者同士の会話であり、「スタートは18時からです」と「夕方6時から始めたいと思います」では前者が「ドイツ人」で後者が「日本人」の書いたものだというように。しか

し、興味深いのはカナダの大学生にはいずれの「メール文」も「日本人」が書いたものではないかと意見が出されたことである。母語話者と非母語話者による日本語使用を分け隔てているのは、日本語に関する知識の有無というよりも、日本語がどう使われているかを知っていること、つまり、日本語が置かれた文脈の違いにある。

その意味で、日本語が母語かどうかにとらわれず、日本語を表現手段とする「越境文学」は、日本語が置かれた文脈によってその使い方が異なることを教えてくれる。「越境文学」とは「日本人も日本も登場しない、日本語の小説」だからである。

教科書で紹介されているイラン人女性作家シリン・ネザマフィ『白い紙』が描くのは、イラン・イラク戦争下の田舎町を舞台にしたイラン人の若者の恋だ。日本の高校生が感じたのは、日本とそれほど変わらないイランの学校の風景だった。一方で、「文章の全体的な雰囲気違和感を感じた」という意見も寄せられた。たとえば、「先生が興奮気味な声でいつもの“君たちの輝かしい将来”という演説を始めた」の「演説」は、「授業」や「話」ではないかという具合である。着目したいのは、この意見にも「日本語」の不自然が「日本」や「日本人」のイメージと結びついていることである。「違和感を感じた」という言葉には日本語の不自然を感じないにもかかわらず、「先生」の「演説」には不自然を感じるのは、日本語を誰が使うのかで日本語への見方が変わってしまう視線の偏りがある。

逆に、「越境文学」はその書き手と同じく自らも日本語の学び手である点で、カナダの大学生にとって強く興味を惹きつけるテーマとなった。たとえば、「日本語として「ゆれ」ている表現だとしても、日本にもよくある「教室の一風景」と思わせておいて、しだいに「イラン」に連れて行かれるように書かれている」という指摘である。高校生はカナダ側の意見を知ること、たとえば「大半の生徒達の職業と進路がとっくの昔に決まっている」という小説の表現に日本とは異なる現実感が込められていることに目を向けていった。日本語で語られてはじめてわかる別の文化があるのだ。

このような交流活動を経て取り組んでいるのが「Re-story」である。日本の高校生が選んだ「昔話」はギリシア神話に『ヘンゼルとグレーテル』、『美女と野獣』に漱石の『こゝろ』で、カナダの大学生が選んだのは『ナイチンゲール』と『白雪姫』だった。現時点(2016年3月15日)では双方が「Re-story」を読みコメントを交わしながら、投稿の準備を行っている。たとえば、カナダ側から送られてきたコメントには、オリジナルと異なるタイトルに変更した理由や日本における作品の評価のあり方、「王子と結婚して城に住む」ことを夢見るヒロインの造型に対する批判などが挙げられている。

これらのコメントにいかにか日本の高校生が応答できるか。その鍵は他者の知をいかに引き受け、未知の世界である未来をいかに想像できるかにかかっている。オリジナルを書き直すためにそれを読み換える解釈を見つけ、また、異なる言語やその使い手、使われる場所も含めた異なる文化への理解を深めること。異なる文化をつなぐ回路は、他者の知をめぐるドラマの中にある。

* 木村朗子先生(津田塾大学)と吉田先生、研究協力者の松村先生、白川先生および2015年度の15名のゼミ生とゼミに参加したみなさんに深く感謝申し上げます。また、本稿は科学研究費補助金(奨励研究)「村上春樹文学における「書き直し」に関する構造的研究」の成果の一部である。

参考文献

- 大澤真幸(2010)「虚構の時代における／を越える村上春樹」『Thinking「0」』4号、pp.4-70
加藤典洋(2015)『村上春樹は、むずかしい』岩波書店
鎌田修他(2012)『生きた素材で学ぶ 新・中級から上級への日本語』ジャパンタイムズ
越川芳明(2007)『ギターを抱いた渡り鳥-チカーノ詩礼賛』思潮社
「BOOK SHORTS」<http://bookshorts.jp/entry2015/>(2015/2/15)
村上春樹(1980)『街とその不確かな壁』『文学界』第34巻第9号、pp.46-99
村上春樹(1985)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社
村上春樹(1990)『村上春樹全作品 1979～1989④』講談社
山根由美恵(2007)『〈物語〉の認識システム』若草書房
Stewart, Sarah. (2012). *The Quiet Place*. New York: Farrar Straus Giroux Books.